

〈あのころの「誌要」〉と『日本文学誌要』との 出会いから現在まで

間宮, 厚司

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

100

(開始ページ / Start Page)

25

(終了ページ / End Page)

27

(発行年 / Year)

2019-07-27

〈あのころの「誌要」〉

『日本文学誌要』との出会いから 現在まで

間宮 厚司

私が最初に手にした『日本文学誌要』は、一九九五年三月の51号です。それは法政の卒業式の三月二四日に、外間守善先生からアルカディア市ヶ谷（私学会館）のレストラんで手渡されました。そして、その時に、四月から法政の教員になる私は、有益ないくつかの助言と要望を一つ、うかがいました。

この51号は、「外間守善教授御退職記念特集号」（巻頭言は、小田切秀雄「外間守善と法政大学」）であり、この日が新・旧言語担当教員のバトンタッチになりました。なお、一九九五年四月からゼミの授業が文学・言語・文芸の三コースに分かれ、新制度がスタートしました。当時、三四歳であった私も気づけば、今夏で五九歳になります。あつという間の四半世紀でした。

さて、51号の外間守善「南の島の心」（一九九四年七月

九日、法政大学国文学会での講演）の最後には、「法政大学に非常勤講師の時代をいれて二十八年間お世話になりました」と記されています。振り返れば私の場合、一九八八年から通信教育部や文学部の授業を担当していましたので、外間先生の勤続年数を既に越えてしまったことを知り、驚愕しています。ちなみに、伊海先生と遠藤先生は若き日の私の授業を履修していました。そのお二人が、現在は同僚教員となり、本当に感無量です。

ところで、私自身、『日本文学誌要』の何号に一体何を執筆していたのか、詳しく覚えていません。そこで、この百号記念を機に、目次をチェックして、調べてみましたところ、結果は左記のとおり、計一五号にわたって、執筆しておりました。

53号の〈新刊紹介〉 外間守善著『南島文学論』他

54号の〈論文〉 『万葉集』六五五番歌「邑礼左変」再論

56号の〈展望（言語）〉 若い世代の気になることは

60号の〈論文〉 『万葉集』一六〇番歌の訓

61号の〈新刊紹介〉 望月郁子著『仏教界に辞書は在っ

たか―古字書の新研究―』

62号の〈論文〉 『万葉集』一五六番歌の訓解

63号の〈論文〉 オモロの語源をめぐって

64号の〈論文〉 『おもろさうし』における自立語の口蓋

化と非口蓋化の両用表記

71号の〈論文〉 テダ（太陽）の語源

72号の〈資料紹介〉 高村光太郎書簡―田村松魚宛（一）
 73号の〈資料紹介〉 高村光太郎書簡―田村松魚宛（二）
 74号の〈資料紹介〉 高村光太郎書簡―田村松魚宛（三）
 80号の〈追悼〉 佐川さん、色々ありがとうございました。
 87号の〈追悼〉 外間守善名誉教授追悼
 90号の〈論文〉 『万葉集』の「入潮為」考
 通覧すると、〈論文〉が七回（『おもろさうし』や『万葉集』に関する言語研究）、〈資料紹介〉が三回（高村光太郎新出書簡を田村松魚研究会の代表として執筆）、〈新刊紹介〉が二回（外間守善先生と望月郁子先生の御著書）、〈展望（言語）〉が一回、〈追悼〉が二回（佐川誠義先生と外間守善先生）という回数（内容）でした。

一方、ありがたいことに、小著や編著を〈新刊紹介〉や〈書評〉で、取り上げていただいた号も、次のように五回ありました。いずれも『日本文学誌要』に掲載された〈論文〉や〈資料紹介〉の原稿がそこには含まれており、そのお陰で出版されたものです。

64号の〈新刊紹介〉 『万葉難訓歌の研究』
 69号の〈書評〉 『万葉集の歌を推理する』
 73号の〈書評〉 『おもろさうしの言語』
 76号の〈書評〉 田村松魚研究会編『高村光太郎新出書簡』
 86号の〈書評〉 『万葉異説―歌ことばへの誘い―』
 こうして目次をたどったのですが、『日本文学誌要』と私との関わりを懐かしく思い出すことができました。思

い返せば、学会発表を行っても、私の場合は万葉難訓歌や語源といった、ややもすると異端で邪道な研究と見なされがちな研究のため、学術誌に採用されにくい内容でしたが、自由な思考を保証する法政大学国文学会の『日本文学誌要』であったからこそ、掲載が許されたのでしょうか。心より感謝申し上げます。

続いて、私のゼミ授業で発表して、指導に当たった大学院生の〈論文〉及び学部生の〈卒論〉が掲載された一二本を列挙します。

57号の〈論文〉 平田淳己 万葉集第九四三番歌―ウニシモアレヤイヘオモハサラム」の文構造―

村島祥子 掛詞―構造の分析と形態の分類―

59号の〈論文〉 村島祥子 万葉集における掛詞的表現

62号の〈卒論〉 伊藤光子 当て字について

67号の〈論文〉 村島祥子 続日本紀宣命における〈名詞―ナガラ〉

小山なかば 万葉集二六七五番歌「立てば継がるる」について

70号の〈論文〉 村島祥子 上代の〈ゴトシ〉

72号の〈卒論〉 弓香織 小説における擬音・擬態語の時代差

74号の〈論文〉 山崎和子 万葉集一・二六七六番歌

「君が着る三笠の山に居る雲の立てば
継がる恋もするかも」の解釈につい
て

75号の〈論文〉 弓香織 万葉類歌の比較——一五〇—番

歌と一九八八番歌—

76号の〈論文〉 阿部美菜子 「人潮為」(万葉集一二三

四番歌)の訓読について

87号の〈論文〉 ヤナ・ウルバノヴァー 琉歌の季節語

「春夏秋冬」をめぐって—オモロや和

歌との表現比較—

右の中で、村島氏、山崎氏、阿部氏、ヤナ氏の四名は、課程博士を修了しました。実は、冒頭に書いた外間先生の要望とは、「間宮君が退職するまでに、博士号を少なくとも一人は出してほしい」というものでした。そして、外間先生は博士号を出すことの大変さと喜びを熱く語って下さいました。その時の約束を思いのほか早く実現できたのは、時代の違いと、熱心に研究する優秀な大学院生に恵まれたからに他なりません。

以上、『日本文学誌要』と私の関係でした。益々の御発展を祈念し、是非とも二百号達成を実現していただきたく。

(まみや あつし・本学教授)